

『わたり鳥の旅』

作 樋口広芳 絵 重原美智子
借成社（2013年3月）



5月10日の夜、遠くから「ホッホ、ホッホ」と特徴のある鳴き声が聞こえてきました。毎年今頃、東南アジアから渡ってくるアオバズクです。青葉の頃やってくる

フクロウという意味です。鳩くらいの大きさで、日本で雛を育て、秋には家族で南に帰っていきます。でもどんなコースの旅をしてくるのか、その他の渡り鳥たちも、渡りのコースは謎のままです。

絵本『わたり鳥の旅』は、人工衛星からの電波を使って、渡り鳥の追跡調査に成功した日本の鳥類学者の記録です。鳥に小さな送信機をつけ、その電波を人工衛星がキャッチし、そこから地上の受信局に送られたものが、各コンピュータに送信される仕組みです。毎日、コンピュータに鳥たちの移動の様子が送られてきます。

冬鳥のコハクチョウ、マナヅル、夏鳥のハチクマという3種類の渡り鳥のそれぞれの旅が、鳥瞰図で描かれています。

コハクチョウの「のり子」（糊で送信機を付けた

ことからの命名）は、北海道からサハリン、ロシアを通過して北極海近くまで3083キロの旅をします。

鹿児島を旅立ったマナヅルの親子は、朝鮮半島の非武装地帯で羽を休め、中国東北部の平原まで、2580キロの旅です。

夏鳥のハチクマ（蜂を食べる鷹）は、長野県安曇野から、インドネシアのジャワ島まで、1万キロもの旅です。到着地点のジャワ島の村は、安曇野と環境がよく似ている場所でした。そこで冬を過ごし、春になると、また日本への長い旅を開始するのです。旅のコースは春と秋で少しずつずれても、目的地へは何丁目何番地まで同じという不思議さ。東南アジアからくるアオバズクの旅は、ハチクマの旅のコースに似ているかもしれないと、思いました。

ページをめくると、力強い鳥たちの羽ばたき、その下に広がる緑の島や海、まるで鳥たちといっしょに旅をしている気持ちになります。鳥たちには国境は関係なく、途中羽を休める中継地が大切なことがわかります。

もっと詳しく知りたい方には、同じ著者の『鳥たちの旅』（NHKブックス）が出ています。

（桑原）